『良友』畫報と華僑ネットワーク

――香港・華僑圏との關連からみた〝上海〟大衆文化史――

村井寛志

はじめに
第一節　『良友』創刊時のスタッフと廣東系ネットワーク
一　伍聯德と良友印刷公司の發足
二　資金調達と廣東系ネットワーク
第二節　良友公司の資本・市場と華僑
一　初期良友公司の株主
二　伍聯德の海外遊歷とネットワークの擴大
第三節　海外販路の展開と國内市場へのシフト
一　初期『良友』と海外市場
二　國内市場へのシフト
三　新文學とのつながり
第四節　一九二〇～三〇年代の文化産業の動向との同時代性
まとめ

表① 「舊上海」または「老上海」をタイトルまたは副題、シリーズ名などに含む書籍

		1950年以前	1951-60	1961-70	1971-80	1981-90	1991-2000	2001-現在	計
國家圖書館	舊上海		1	4	1	14	19	4	41
	老上海	1					11	18	30
上海市圖書館	舊上海			3	2	8	13	2	28
	老上海	2					17	26	45

2005年6月7日の時點での檢索

はじめに

近年、沿海部を中心に中國の飛躍的な經濟發展が續くなか、近現代史研究の分野においても都市の社會、文化に注目する研究が盛んになりつつある。とりわけ、かつての繁榮を再び取り戻した感のある上海では、國際都市であることが強調されると同時に、ローカルな都市の歴史への關心が高まっている。こうしたなかで、かつて否定的に見られてきた一九四九年以前の上海の歴史に對しても懐古的な興味が向けられているが、それを端的に示すのは、この時期の上海を表現する言葉の變化だろう。

表①は、「舊上海」、「老上海」というキーワードで北京の國家圖書館と、上海市圖書館の藏書を檢索した結果をまとめたものだ。四九年の中華人民共和國成立以後使われていた「舊上海」という言葉に代わり、九〇年代後半を境に「老上海」（オールド上海）という言葉が使用される傾向があることが分かる。かつて、「新中國」に對應する否定的な表現として「舊中國」、「舊社會」などの言葉が使われていたことに見られるように、「舊」は明らかにネガティヴな含意を持つのに對し、(1) 中國語における「老」は、單に古いという意味のみならず、親しみと敬意が込められた表現として使われる言葉である。こうした呼稱の變化にも、四九年以前の上海に對する認識の變化が表れている。

もちろん、ここで「老上海」としてイメージされるのは、中國の傳統的な都市の姿ではない。これら「老上海」などの書名を冠した書籍の表紙に採用された圖柄などを見れば、その大部分が租界の西洋建築や、當時の流行のチャイナ・ドレスなどに身を包んだ中國女

性の圖像であり、この時期の上海のイメージを構成するものとして一般的に流布している視覺表象が〝モダン〟（現在の感覺ではレトロなのだが）を表わす記號であることが見て取れる。

こうした視覺イメージの形成に關しては、一九二〇年代後半以降急速に普及した映畫產業や寫眞印刷などの複製技術を通じて、大量の映像作品や印刷物が出回ったこと、そしてそれらが現在も殘存し續けていることが大きく影響していると考えられる。後者に關して言うなら、當時流行したタバコなどの廣告として使われたカレンダー（月份牌）に描かれた美人畫や、グラフ雜誌が想定される。本報告で扱う『良友』畫報（一九二六～四五、以下『良友』）もまた、そうしたモダンガールの畫像を提供する資源の一つとなっている。(2)

一九二六年に上海で創刊された『良友』は、中國全體において最も早い時期に登場した寫眞を中心とするグラフ雜誌で、當時の都市文化・社會生活を研究する重要な史料として近年利用が進みつつあり、(3)また『良友』それ自體についても若干の研究が出てきている。(4)

ここで、『良友』を含め、これらの表象を主題とした研究は近年數多いが、そこで自明の前提とされているのは、そこに表れた〝モダン〟を表す記號の數々が〝上海の〟文化だということだ。

これに對し本稿では、『良友』の資金調達網や市場の考察を通じ、それらが香港を介した廣東系華僑のネットワークと密接に結びつき、中國という一國のレベルをはるかに超えた範圍で展開されていたことを示していく。そしてこれについては、當時の上海の都市消費文化を形成する他の要素（百貨店、映畫產業）についても類似の狀況を指摘できる。その意味において、上海の特權性という文脈でのみが強調されがちな戰閒期の都市大衆文化の形成について、異なる視點を提供できると考えている。

第一節　『良友』創刊時のスタッフと廣東系ネットワーク

一　伍聯德と良友印刷公司の發足

『良友』は一九二六年二月に上海で創刊された寫眞中心の畫報で、一九四五年一〇月に至るまで、一七二期刊行されている（實質的には一九四一年一〇月の一七一期まで）。當時の中國では比較的先端的な印刷技術を驅使し、毎號の表紙に女性映畫スターなどの寫眞を配したことで知られる。[5] 掲載内容は、内外の各界著名人の紹介、時事から映畫、スポーツ、ファッション、文學、美術に到るまで多彩で、特に一九二〇年代～三〇年代の上海に登場しつつあった新たな娯樂・ライフスタイルを寫した寫眞を多數掲載していることで、この方面の研究ではしばしば引用されている。

本節では、まず『良友』の發行元である良友印刷公司[6]（以下良友公司と略）發足の經緯とスタッフの構成について考察し、それが廣東系のネットワークとどのように關わっていたかを明らかにする。良友公司の發足の經緯や經營スタッフの構成を語る上で、創始者である伍聯德（一九〇〇～一九七二）の經歴は切り離せない。伍の經歴を簡單に紹介しておこう。

伍は廣東省臺山縣の出身で、父は若い頃アメリカに移住してクリーニング店を開き、家族に支送りをしていた。彼が當時廣州にあった嶺南大學豫科に入ったのは、父の知人で嶺南の最初の中國系スタッフだった鍾榮光[7]の薦めによる。伍自身の回想によれば、彼が印刷・出版の路に興味を抱いたのは、母校嶺南學校の圖書館で舶來のカラー印刷物と出會ったことがきっかけだという。[8]

伍は在學中、やはりアメリカ在住の父を持つ同級生の陳炳洪（後出）とともに、『新繪學』なる書を翻譯し、上海商務印書館に版權を三〇〇元で賣っているが（出版は一九二一年）、このとき上海の商務印書館を訪れたことがきっかけとなり、アメリカ留學を望んでいた父の反對を押し切って、上海で出版業に携わることを決意する。[9]

恩師鍾榮光の紹介狀を持って上海の商務印書館の張元濟の下を訪れた伍聯德は、「兒童教育畫」の編集や圖案のデザインの仕事を任されるが、自らの提案した計畫がなかなか通らないことから、やがて獨立し、『良友』の前身たる『少年良友』を立ち上げるが、ほどなくして失敗。その後、後述する廣東・香港系有力者の援助を得て再起し、一九二五年七月に良友公司を立ち上げた。

このように始まった良友公司だが、發足當初のスタッフとしては、經理の余漢生を筆頭に、伍が廣州から助手として呼び寄せた明耀五ら二人を含め、いずれも嶺南の同窓生である（明耀五は雲南人）[10]。それ以外のメンバーでは、『良友』創刊當初、鴛鴦胡蝶派風の連載小說を擔當し、同公司の發行する他の雜誌の編集者も務めた盧夢殊、劉恨吾がいるが、いずれも廣東出身者であったようだ。後に『良友』最盛期を代表する編集者となる梁得所、馬國亮も、廣東出身であった。良友公司の主だったスタッフは、伍の嶺南の同窓生と廣東出身者を中心に構成されていたと言えよう。

二　資金調達と廣東系ネットワーク

良友公司立ち上げの際の資金調達においても、廣東の地緣を媒介としたつながりが大きな意味を持つことになった。既述の通り、商務印書館から獨立した後、伍聯德はまず『少年良友』という雜誌を創刊したが、これはほどなくして失敗する。故鄕の廣東に金策に戻る途上の伍聯德に救いの手をさしのべたのは、故上海先施公司總經理歐彬の未亡人譚惠然（以下歐彬夫人）だった。伍聯德は上海の廣東籍クリスチャンが集う教會で歐彬夫人と知り合い、伍が『良友』の前身の『少年良友』の經營に失敗した後、香港に戻る船の中で再會した。この時、夫人より、夫が生前創設しながらも經營が停頓していた印刷工場を廉價で讓ることを持ちかけられ、後には廣東銀行上海分行から融資を受ける際の保證人にもなってもらっている[11]。

ここで、伍聯德が歐彬夫人と出會ったという廣東籍の集まる教會だが、『良友』に掲載された元商務印書館英文部の鄺

富灼[12]の回想に、それと思われる記述がある。鄺によれば、廣東出身の彼は、上海に居を移した當初、上海語が分からず、かといって外國の教會では打ち解けられなかったので、廣東人の禮拜堂の必要を感じ、そこで歐彬夫婦など數人を集め、旅滬廣東中華基督教會を組織した。所在地は良友公司にも近い北四川路横濱橋附近で、永安・先施兩公司で職員をこの教會に通わせていたという。[13] 伍聯德と歐彬夫人の出會いという偶然の出來事の背景にも、こうした廣東人の集まる據點が介在していたのだ。

伍が廣東銀行上海分行から融資を受けた際にも、嶺南學校の同學李偉才のつてが關係している。李偉才の父李自重[14]は、當時廣東銀行總經理であり、伍の賴みで廣東銀行上海分行宛の紹介狀を書いている。[15] 李偉才、李自重父子は、後に良友公司の董事にもなっており（後出**表②**）、後々まで良友公司との關係を持ち續けている。

このように、良友公司は、スタッフ以外の點においても廣東系の同鄕のつながりに支えられていたのだが、むろん、地緣的關係が必ずしも絕對的なものであったわけではない。上海近郊の松江の出身で、後に『良友』の編集にも關わる趙家璧は、彼が良友公司と關わりを持ち始めた二八年頃についての回想で、當時の良友公司のスタッフの約半分は廣東人で、特に高級職員層に廣東人が多かったが、一方で、殘りの半分は江蘇・浙江一帶を含む「上海人」であったと述べている。[16]

彼が良友公司に正式に就職する直前（一九三二年五～六月頃）、新興の『時代畫報』からも誘いを受けたが、その際、「良友公司は廣東人が始めた會社で、中にいるのは廣東人ばかりだ。君は廣東人のために頑張らなくても良いのではないか」、と言われたという。趙は、これは事實ではないとして彼らの申し出を斷っている。[17]

初期良友公司を支えた人脈は、廣東系が大半を占めるものではあったが、詳細を見れば、嶺南學校での同學や、廣東系の教會での出會いなど、伍聯德を中心とした具體的な二者關係の累積によって形成されていた。その意味で、廣東系という括りはあくまでも相對的なものではあったといえよう。[18]

とはいえ、初期の『良友』には廣東省や香港に關わる記事が比較的多いなど、結果として廣東系の影響の大きさは否定

できないものがある。その背景には、スタッフのみならず、良友公司の資金調達や販賣網の形成においてもこうした廣東系のネットワークが大きく關わっていたことがある。次節ではこうした點について詳しく述べたい。

第二節　良友公司の資本・市場と華僑

一　初期良友公司の株主

一九二六年二月、『良友』が創刊した際、初版は三千部に過ぎなかったが、伍聯德自ら香港、廣東方面に賣り込みに行き、その結果この地方での賣れ行きが伸びたため、四千部の增し刷りが行われている。[19] 發行部數は、その後も順調に擴大し、第三七期（一九二九年七月）には三萬部、最盛期の第四五期（一九三〇年三月）には四萬二千部となった（公稱）。この數字は、當時の中國における雜誌販賣數で最大だったと、創業者の伍聯德は自任している。[20]

『良友』の成功に伴い、良友公司は映畫雜誌『銀星』など他の雜誌の出版や體育用品の販賣も行うようになった。一九二八年一一月の「招股簡章」（株式の買い手募集要項）によれば、同年の販賣額總計は二五萬元、內譯は印刷が三三％、出版が五二％、體育用品一五％で、この時、良友公司には香港、廣州、梧州の三ケ所に支社（分公司）を持っていた。[21]

こうしたことから、當初の『良友』の販賣先が、香港・廣州に據る所が大きかったことが見て取れる。『良友』の販賣網については第三節で詳しく考察するが、ここでは、良友公司の資金調達の面においてもこの地方に依存する部分が大きかったことを確認しておく。

良友公司は一九二八年八月以降、資本金國幣二〇萬元の株式會社（股份有限公司）としてとして登記しているが、その際の書類から、經營陣・出資者について一定の情報を得ることが可能である。これは、從來の研究では使用されていない史料であり、回想錄などでは全く觸れられていない情報が含まれている。

表②　各年の良友公司董事・監察

1928年				1931年			1936年6月	
名	住所	所屬	選擧結果	名	股數	住所	名	住所
李自重	香港	廣東銀行	560	陳爵信	12	上海	余漢生	上海
李偉才	香港	香港良友	532	李自重	11	香港	陳炳洪	上海
洪我仙	上海	嶺南分校	512	李偉才	17	香港	羅廣霖	南京
伍聯德	上海	良友	504	伍聯德	14	上海	梁無恙	廣州
陳爵信	米オレゴン州	Hop Hing Lung	484	伍永高	33	ニューヨーク	簡又文	上海
余漢生	上海		468	洪我仙	13	汕頭	歐偉國	香港
劉維賀	廣州		440	黃保民	100	香港	潘創惟	香港
黃保民	香港	良友	385	余漢生	14	上海	陳耀賢	廣東新會
陳炳洪（監察）	香港		554	陳炳洪	監察	上海	黃啓五	廣州
							洪我仙（監察）	廣州

出典：Q90-1-616良友圖書股份有限公司　(1928.9-1929.7)
『良友』22期、1927年12月30日により補足。
28年に關しては、股東による選擧の結果を記した。

一九二八年當時の良友公司の董事の姓名・住所・所屬を記したのが**表②**だ。これによると、八人の董事のうち、上海在住は三人のみで、他に香港在住三人（監察の陳炳洪も香港）、廣州が一人、更にアメリカ在住の者もいる。[22] 三一年の董事は居住地の若干の異同はあるものの、一人を除いて同じ人物が就いている。

こうした董事の構成は、良友公司の株主（卽ち資本の來源）を反映したものでもある。**表③**、**④**は、良友公司の二八年當時の株主（股東）について、居住地や所屬先ごとに整理したものだ。所有株數の多い順に並べれば（一股＝國幣一〇〇圓）、香港二六六股（四四・六％）、アメリカ一四三股（二四・〇％）と國外が續き、シンガポールも含めれば、海外在住者が四一四股（六九・三％）と、實に資本の七割近くが國外在住者から調達されている。國內では廣東（ほとんど廣州）が一一一股（一八・六％）で、上海は七〇股（一一・七％）に過ぎない。

特筆すべきは、良友の經營陣と資本における香港

の突出した位置と、それに比して上海在住者の占める割合が少ないということだ。二〇股以上を有する上位株主についての情報をまとめた**表⑤**を見ても、在米華僑の二人と廣州の一人以外は香港在住で、上海在住者は一人も入っていない。

ここに突出した筆頭株主として登場する黄保民という人物だが、黄は董事の一人で、香港良友公司支店の所屬となっている（恐らくは經營者）[23]。更に、一八年の登記書類で説明された良友公司設立の經緯では、良友公司は「商人黄保民等が資本金國幣二萬元を集め、上海北四川路に良友圖書印刷股份有限公司を開設し、並びに香港、廣州及び其の他の大都市に分公司を設けた」ということになっている[24]。これは、『良友』誌面上の記載や伍聯德ら主要スタッフの回想で紹介されているエピソードとは全く異なっており、事實と受け取ることはできないが、黄保民という人物が、少なくとも登記の上では大きく扱われる存在であったとは言える。

實際は、上海から遠く離れた地に住む董事・股東たちが、良友公司の具體的な經營方針、あるいは雜誌の編集などに直接關與していたとは考えにくく、また彼らの關與を窺わせる材料は今のところない。しかし、檔案史料を利用することで、『良友』スタッフの回想や誌面のみを用いた從來の研究では語られなかった位相が明らかになったように思われる。初期良友公司の經營について、香港や海外との關係を抜きにして語るとすれば、その重要な側面を見落とすことになる。

二　伍聯德の海外遊歷とネットワークの擴大

これまでに見たように、初期良友公司の經營陣・株主において、香港在住者の占める比重が大きかったのだが、香港は、一九世紀末以來、廣東からアメリカ、オーストラリア、東南アジアなどの海外に移民が出國する際の重要な窓口となっていた。移民が廣がる經路は、翻って海外華僑資本が中國に環流する經路ともなり、香港は廣州などの中國都市と海外を結ぶ商業ネットワークの重要な據點の一つとなっていく[25]。

表③の良友公司の股東を見ると、出資額で香港に次ぎ、人數的には最大であるのは在米華僑であった。良友公司のネッ

表③　1928年當時の良友の株主（居住地別）

場所	人（%）	股(%)	平均（股/人）
上海	7(11.9)	70(11.7)	10.0
蘇州	1(1.7)	2(0.3)	2.0
廣東・廣州	15(25.4)	111(18.6)	7.4
香港	16(27.1)	266(44.6)	16.6
シンガポール	1(1.7)	5(0.8)	5.0
アメリカ	19(32.2)	143(24.0)	7.5
計	59(100.0)	597(100.0)	10.1

出典：良友圖書印刷股份有限公司股東名簿（1928.8.15）

表④　1928年當時の良友の株主（所屬別）

所屬	人（%）	股(%)	平均（股/人）
廣東銀行	4(6.8)	66(11.5)	16.5
先施公司	1(1.7)	10(1.7)	10.0
Mandarin Restaurant	7(11.9)	58(9.7)	8.3
良友	12(20.3)	182(30.5)	15.2
[うち廣州]	[3(5.1)]	[15(2.5)]	5.0
[うち上海]	[3(5.1)]	[30(5.0)]	10.0
[うち香港]	[6(10.2)]	[137(22.9)]	22.8
嶺南大學（含分校）	7(11.9)	40(6.7)	5.7
不明	28(47.5)	241(40.4)	8.6
計	59(100.0)	597(100.0)	10.1

出典：良友圖書印刷股份有限公司股東名簿（1928.8.15）

表⑤　1928年時點での良友公司の大口株主（股數20以上）

股東名	居住地	所屬	股數
黃保民	香港	良友	100
李源	香港	廣東銀行	50
至誠堂(棠？)	廣州	不明	40
陳炳洪	香港	不明	40
伍永高	米	Mandarin Restaurant	30
關詒蓀	香港	良友	20
黃啓五	米	Hop Hing Lung	20

出典：良友圖書印刷股份有限公司股東名簿（1928.8.15）

トワークが、香港を經由しつつ海外華僑にまで廣がっていたことが見て取れよう。以下では、こうしたネットワークが擴大していくプロセスについて、具體的にみていきたい。

良友公司と海外華僑のつながりについては、創業者伍聯德による一九二六～二七年の東南アジア、及び北米遊歷の成果が大きかったと思われる。その際に大きな力を發揮したのが、嶺南大學預科の同學のツテだった。

伍聯德は、一九二六年一一月、現地での發行狀況や讀者の需要を視察するため、シンガポール、ペナン、クアラルンプールなど英領東南アジアの華僑圈を訪れている。シンガポールでは、嶺南の同窓生で劉貝錦影片公司經理の郭超文の案內により、南洋の映畫界を視察したり、福建系華僑の實業家陳嘉庚など、地元の名士と會っている。(26)

一旦上海に歸った後、伍は更に、翌一九二七年四月より、神戸、ホノルル、サンフランシスコという經路でアメリカを訪れる。サンフランシスコで出迎えてくれたのも、やはり嶺南同窓生の鄧祖蔭（大埠商會總幹事）で、彼の案內でチャイナタウンを視察している。(27)

更に、バンクーバーでは『良友』のカナダでの販賣代理責任者の龔貞信を訪ね、フィラデルフィアで「旅美巨商」伍永高とも會っている。(28) 後者は**表②**、**⑤**にも名前が見え、良友公司の有力株主で、董事（一九三一年）にもなっている。彼が經營していたと思われるマンダリン・レストランの關係者からは、計七人が良友公

司に投資している。[29]

なお、この訪米は最新の印刷技術の視察という側面も有しており、アメリカ滞在十數年で、製版技術を研究している伍錦源という人物と出會い、翌年に歸國して良友のために製版部を作るという同意を取り附けている。[30]

この訪米の途中、伍は、かつて『新繪學』をともに翻譯した嶺南の同窓生で、その後アメリカで新聞學を學んでいた陳炳洪とも會っている。彼の父陳爵信は、この後良友公司の大口の出資者となり、炳洪が父の投資金を携えて上海を訪れ、一九二七年秋以降『良友』の仕事に參加することになった。炳洪は父の代理として副經理の役職も務め、[31] 彼らの名は**表②**、**⑤**に見え、炳洪は良友公司の第三の大口出資者にして、董事會の監察にもなっている。

炳洪は、大株主というのみに拘わらず、編集にも關わり、彼の參加以降、『良友』の寫眞のキャプションには、漢字の讀めない海外の華僑に配慮した英文の説明が附されることになる。在米華僑の出資者の獲得は、誌面構成においても華僑市場に向けたアピールを促すことにつながったのだ。

本節では、檔案史料に基づいて、初期良友公司の董事・股東の狀況を整理し、香港、在米華僑がそこにおいて大きな位置を占めていることを明らかにし、また、伍聯德の訪米が、良友公司と在米華僑とのネットワークの強化をもたらす過程について整理した。こうした資金調達のネットワークの廣がりは、少なくともその初發の段階において、伍聯德が自ら東南アジアや北米を訪問するなどの個人的努力に大きく依據していたわけだが、その過程で、嶺南の同窓生というツテが大きな役割を果たしていた。前節でも見たように、伍を中心としたネットワークは、主として母校嶺南大學（豫科）と廣東系という軸を中心に展開されていた。嶺南大學は多くの海外華僑の子弟が學び、卒業生からも少なからぬ海外移住者が出ている。また、伍の故鄉臺山は香港に近く、海外華僑を多く輩出した土地である。これらに基づいたネットワークは、上海のみに止まらず、香港、あるいはそこを介して海外華僑にまで廣がっていく可能性をそもそも有していたと言えるだろう。

なお、株主の居住地域に關しては、その後『良友』の販賣が軌道に乘っていくと、こうした個人的努力をはるかに超えて擴大していったようだ。一九二八年冬、良友公司は增資のため、出資者を募る廣告を『良友』に掲載しているが、[32] これに對する應募者は、國內は雲南、四川、國外は南アフリカにまで及んでいたという。[33] 次節では、こうした株主の廣がりに對應する、『良友』の販賣市場の廣がりと、その變遷について考察することにしたい。

第三節　海外販路の展開と國內市場へのシフト

一　初期『良友』と海外市場

前節では、良友公司と海外の華僑のネットワークについて、主として株を通じた資金調達との關係から見てきたが、株主の分布は、『良友』の販賣市場が海外華僑の世界に廣がっていたことに對應していた。本節では、良友の販賣代理店、支店の分布から、市場面における華僑圈とのつながりを見ていくことにする。

初期『良友』の奧附には、「代售處」、「分銷處」などと區分される店の所在地と名稱の一覽が掲載されている（後述の「特約代理店」とは明確に區別され、『良友』の販賣を取扱っている店という程度の意味だと思われ、以下では「販賣取扱店」として總稱する）。この一覽によって『良友』の販賣網の概要を知ることができる。**表⑥**は、一覽の變化が大きかった六つの號を選び、そこに記載された情報を整理したものだ。[34]

海外の販賣取扱店として、早くも第二期（一九二六年三月）に香港の名が見え、第九期（一九二六年一〇月）からはシンガポールの名が見られる。その後、伍聯德の東南アジア訪問以後、英領を中心に東南アジアの販賣取扱店數が增え、第二〇期（一九二七年一〇月）以降、販賣取扱店の分布他の東南アジア地域や南北アメリカに擴大し、國內を壓倒する勢いで增加している（但し、長江下流域の數が減るのは、これ以降上海市內の販賣代理店が記載されなくなったため）。第二六期（一九二九年三

表⑥『良友』の販賣取扱店の地域分布

期	年 月	總計	國內計	北方	長江下流	長江中上流	東南地域	國外計	東南アジア(英領)地域	蘭領東インド	東南アジアその他	北米(含フィリピン)	南米
4	1926. 5	5	2	1			1	3	3				
特	1926.11	6	4		1	1	2	2	2				
16	1927. 6	28	19	1	15	1	2	9	7			2	
20	1927.10	52	18	2	9	2	5	34	14	6	4	8	2
24	1928. 2	63	23	3	7	5	8	40	17	4	6	11	2
31	1928.10	73	29	3	10	4	12	44	18	7	7	7	5

出典：『良友』各號の奥付

月）以降、販賣取扱店の記載がなくなるので、以後の展開は不明だが、初期の『良友』が、海外市場に販賣を大きく依存していたことが伺われよう。

一九二七年五月以降、良友では上記の販賣取扱店とは別に、香港、廣州に支店を設けている。[35] 更に、各地に、『良友』に止まらない、他の出版物やスポーツ用品など、良友公司の製品全般の販賣業務を取り仕切る「特約代理店」を設けている（呼稱は時期により若干變化するが、分店と同格の扱いになっている）。**表⑦**は、その所在地の變遷を整理したものだ。

第三一期（一九二八年一〇月）以降、『良友』特約代理店は香港、廣州の分店に加え、海外のシンガポール、シカゴを含んだ五つになる。第四三期（一九三〇年一月）にはこれに日本（神戸）[36]、カナダ、キューバが加わり、第四四期（同年二月）には更に臺灣を加えた八店になる。三一年以降と比較すれば明瞭だが、初期の『良友』販賣市場において壓倒的に海外に重點が置かれていたことが分かる。[37]

『良友』にはしばしば自誌の廣告募集の案內を掲載しているが、廣告掲載についての『良友』のセールス・ポイントとされるのは、視覺的に美しい畫報という特性から、長く保存されるので廣告の效果が持續的長期に渡るという點が一つと、それと並んで、『良友』が海外華僑圈で廣く讀まれているため、廣告の效果が行き渡る範圍が廣いという點である。[38] 初期の『良友』には華僑關係の記事が多く、世界各地の華僑總會の集合記念寫眞などが頻繁に掲載されていたが、こうした點も、『良友』が市場、資本ともに海外、特に英語圈の華僑に依據していたことと

表⑦　1928年當時の良友の株主（所屬別）

期	年　月	店數	所在都市、國名	呼稱
23	1928. 1	1	**香港**[27.5-41.10](4月より**廣州**[28.4-37-12]が追加)	分發行處
31	1928.10	5	廣州、**梧州**[28.10-36.7]、香港、**シンガポール**[28.10-41.10]、**シカゴ**[28.10-30.6]	分發行
43	1930. 1	8	廣州、梧州、香港、シンガポール、**日本(神戸)**[30.1-6]、シカゴ、**カナダ**[30.1-6]、**キューバ**[30.1-6](2月より**臺灣**[30.2-6]が追加)	特約代理
49	1930. 8	4	廣州、梧州、香港、シンガポール	發行者(31年4月より特約代理)
61	1931. 9	8	**南京**[31.9-38.5]、廣州、**汕頭**[31.9-37.11]、梧州、香港、**厦門**[31.9-38.5]、シンガポール、**ニューヨーク**[31.9-36.9](後、**北平**[31.11-35.12, 36.8-38.5]、**漢口**[31.11-38.6]、**重慶**追加[33.3-38.6)	特約代理
122	1936.11	10	南京、廣州、漢口、厦門、北平、重慶、**成都**[36.8-38.6]、汕頭、香港、シンガポール	特約經售
136	1938. 4	0	香港に一時避難(6月上海復歸)	
138	1938. 6	6	漢口、重慶、成都、廣州、香港、シンガポール	特約經售
139	1939. 2	2	香港、シンガポール	特約經售
172	1945.10	0	(上海以外の記載なし)	

史料來源：『良友』各期の奥付。分發行、特約代理など、時期によって呼稱が異なる。特約經售ゴシック體は新たに登場した店。地名の後の年號は、店名が掲載された期間。

關連しているだろう。『良友』にとって海外販路はその後も重要な意味を持ち續け、一九三四年の百期記念特刊の段階では、東・東南アジアはもとより、南北アメリカ、ヨーロッパからアフリカの一部に到るまで、『良友』の販賣先各國が記された世界地圖が掲載され、「『良友』の讀者は天下に遍し」と豪語された。(39)

二　國内市場へのシフト

ここまで、初期『良友』の特約代理店の分布の考察を通じて、『良友』の販路として海外市場が重視されていたことを示してきた。こうした傾向はその後も殘り續けるが、一方で、一九三一年ころから、一定の變化が見られる。三〇年代の『良友』は國内市場を大きく重視するようになるのだ。以下では、こうした國内向けの轉換について考察する。

表⑦に見えるように、一九三〇年二月（第四四期）以降、『良友』の特約代理店は廣州、梧州、香港、シンガポール、神戸、シカゴ、カナダ、キューバ、臺灣の九箇

所に擴大するが、わずか半年後、新たに擴大した神戸など海外五店の名前が消え、廣州など四店を殘すのみになる。

この間の事情ははっきりとしないが、米國に關しては、『良友』第四七期（一九三〇年五月）に「美洲各僑胞各商店」宛ての公告が掲載されている。それによると、從來は米國方面の販賣は、中華文化宣傳社が總代理として販賣業務を一括處理していたが、轉送などのコストを省くため、同社との契約滿期を契機に、一九三〇年九月一日以降、『良友』販賣を希望する者が良友公司と直接連絡を取るように改めたという。(40)

良友公司の側の海外販賣方法に技術的な變更があったとするなら、海外の特約代理店の激減は、そのまま海外市場の縮小を意味しないであろう。(41) むしろ、『良友』の販賣網が個人を中心としたネットワークを超えた廣がりを見せていたことを示しているという風にも取れる。

しかし一方で、海外における特約代理店が消えたことに呼應するかのように、この時期、國内における特約代理店・支店が增加することが目を引く。

『良友』第五八期（一九三一年六月）では、チェーン店形式〔「連環商店制」〕を採用し、新たに汕頭、厦門、漢口、南京、濟南、天津、北平（現北京）、瀋陽の國内八都市に支店を設ける計畫を打ち出している。實際、同年九月以降はこのうち汕頭、厦門、南京の特約代理店の名前が掲載されるようになり（ニューヨークも）、一〇月には、北平、漢口、三三年三月には重慶がこれに加わる（**表⑦**）。(42)

一九二〇年代後半の初期『良友』が多分に海外市場に依存していたのに比して、ここには明白に國内市場の重視が窺える。加えて、一九三〇年以前には廣東語圏（廣州、梧州）に限定されていた國内の特約代理店が、華中内陸部や北方にまで廣がっていたことが見て取れよう。

こうした重點の變化は經營面においても表れており、先に擧げた良友公司の董事・監察の居住地を見るに（**表②**）、二八年には、九人のうち、四人が香港、一人が在米であったのに對し、三六年六月の時點では一〇人中香港在住は二人で、

これ以外に海外はなく、廣州、南京など上海以外の國内都市の在住者の割合も増えている。

こうした經營面での海外から國内へというシフトは、寫眞中心の畫報という形式の國内における受容と呼應していた。編集者馬國亮の『良友』第一百期紀念特號（一九三四年）での回顧を引用しよう。

昔は畫報は盲目的に暇潰しの品と見なされていたが、しかしこうした觀念は段々と是正されてきた。良友畫報を當初熱狂的に受け入れたのは、偏見が全くない海外同胞たちだった。その後、國内の一般の人々も畫報というものの價値を認識し始めたことは、近年來本誌の國内販賣部數が激増したことや、他の新興畫報の出現などを見ても明らかである。(43)

三　新文學とのつながり

市場の變化は、『良友』の内容にも影響を及ぼした。華僑關係の記事、特に各地の華僑團體や華僑の著名人の寫眞が頻繁に掲載されていたことは初期の『良友』の特色の一つだが、三〇年代に入ると、これはぱったりと姿を消す。

文章を寄稿する作家たちにも變化が見られた。『良友』の創刊當初、連載小説を書いていたのは、盧夢殊、劉恨吾（我）ら廣東出身の作家で、彼らの作風は鴛鴦胡蝶派に近かった（彼らは、『銀星』など良友公司の刊行していた他の雜誌の編集者でもあった）。廣東出身ではないが、二代編集者の周瘦鵑もまた、鴛鴦胡蝶派の雜誌『禮拜六』の中心人物として知られている。(44)

『良友』が三〇年代、北方や内陸に市場を廣げていくに從い、寄稿する作家たちも、廣東系に限らない幅廣い作家が文章を寄稿するようになる。魯迅を始めとして、茅盾、郁達夫、老舍ら、新文學として位置づけられる、名だたる作家が『良友』に寄稿している。

文學史上、一九三〇年代の良友公司は、雜誌『良友』以外に様々な文學作品のシリーズを刊行したことで知られる。これには、文藝書籍出版を擔當していた趙家璧の貢獻が大きいとされる。趙は江蘇省松江縣（現上海市松江區）の人で、良友公司の歴史上數少ない、廣東系以外で起用された編集スタッフである。光華大學附屬中學在學中の一九二八年に『光華年刊』の編集を任され、良友公司に出版を依頼したことをきっかけにスタッフと知り合った。その後、光華大學英國文學系で徐志摩に學びつつ、在學中から良友公司の學生向け出版物『中國學生』の編集を任され、大學卒業後に正式にスタッフとして採用された。(45)

趙は日本の文學全集にヒントを得て、三三年以降、『良友文學叢書』、『良友文庫』などの文學シリーズを刊行し、『中國新文學大系』全十卷（一九三五～三六年）の刊行に結實させた。リディア・H・リウによれば、この『中國新文學大系』の編纂は、世界文學の中に位置づいた中國の國民的（ナショナル）文學を確立するべく、五四以降の新文學を聖典（キャノン）化したものとして位置づけられる。(46)

民國時期の上海は、出身地ごとに分かれたコミュニティのパッチワークとして成立した「移民都市」として發展していたが、一九三〇年代前半には、滿洲事變以後の國家的危機狀況の中で、これを中國ナショナリズムと親和的な「上海人」アイデンティティの下に凝集させていこうという動きが見られた。(47)『良友』が廣東系のネットワークを超えて國內市場に浸透していく過程は、こうした動きとパラレルであった。『良友』の販賣が廣東系のネットワークを超え、廣く國內市場に浸透していったのと同じ頃、良友公司は新文學、とりわけ左翼系の作家とのつながりを強めていった。

第四八期（一九三〇年六月）の梁得所による「編後話」は、讀者からの批判として、『良友』では貧民の生活を多く載せるなどの國內社會の眞實を傳える努力を怠っており、華やかな題材ばかりで貴族化している、との批判を紹介している。しかし、梁は一方で、海外華僑讀者からの意見として、『良友』の讀者には少なからぬ外國人がいて、平素から華人を輕視する先入觀を持っているので、外國にいる華僑の名譽のためにも我が國の新しい事物を宣傳する寫眞を載せるべきだ、

という意見を紹介している。これに對する梁の回答は折衷的なものだが、ここに、『良友』の讀者として、國內の社會問題を追及したい左翼的ナショナリズムと、周圍の他國人に母國の近代的な姿を見せたい海外の華僑という、二つの分岐がすでに生じていたことが見て取れよう。

本節では、良友の取扱店、販賣代理店の分布を元に、良友の販賣網の變遷について考察した。當初の海外中心から、三〇年代には國內重視への轉換が見られたが、これは中國國內における寫眞雜誌というスタイルの受容に對應していたが、それは同時に、左翼系の新文學作家との關係強化をもたらすことになり、このことが良友公司の運營に新たな一面を付け加えることとなった。

第四節　一九二〇～三〇年代の文化產業の動向との同時代性

これまでの節では、良友公司の事例において、經營、資本、市場のいずれの要素をとっても、背後に香港を媒介として海外にまでつながる廣東系のネットワークが介在していたこと、そして三〇年代には國內市場向けのシフトが見られたことを示してきた。本節では、『良友』の展開は當時の上海の都市の文化產業全般の動向と、どのように對應していたのかを考察してみたい。

雜誌發行という點のみに限るなら、『良友』と廣東系ネットワークの如き關係は特異なもののようにも見えるが、一九二〇年代後半以降中國の大都市のライフスタイルにおいて新たな廣がりを見せていた文化產業の中に、一定の同時代性を見ることは可能である。

一九一〇年代後半以降、上海では百貨店〔百貨公司〕という新しいスタイルの商店が登場し、やがて急速に成長していくことになる。一九一七年に南京路に開店した先施公司は、上海における中國系資本の百貨店の最初のもので、翌一八年開店の永安公司と勢力を二分していた。後に先施から分かれた新新（一九二六年創始）、大新（一九三六年創始）と合わせ、

四大公司と稱される。先施公司と永安公司の開業の經緯は概ね似通っている。その創業者は、いずれも廣東省香山縣（現中山市、孫文の故郷）に出自を持ち、一九世紀末にオーストラリアに移住し、移住先でこの新しい商業形態について知識を得た後、一九〇〇年代に香港で百貨店を開業し、その成功を經て、一九一〇年代後半に上海に進出してきた。これら百貨店は、資本のみならず、從業員もそのほとんどが廣東出身者で構成されていた。

傳統的な商店との違いは、様々な輸入工業製品を大規模、かつ總合的に販賣したこともさることながら、當時の上海における百貨店が單なる大規模小賣店ではなく、ホテル、大型浴場、レストランからダンスホール、演劇場などの様々な設備を備え、商業・娯樂・宿泊などの機能を兼ねた總合施設として、當時の都市文化を牽引する役割を果たしていたことが擧げられる。それは同時に、高層建築による偉容、ネオン、ショーウィンドウといった視覺的な效果を備えていた[48]。

第一節で、良友公司發足の際に上海先施公司總經理未亡人からの援助があったことを紹介した。『良友』創刊の直前の一九二六年一月、上海先施公司のスタッフだった劉錫基らが獨立し、新新公司を創設しているが、『良友』創刊號の表紙の裏には一面を使った新新公司の廣告が掲載されており、有力スポンサーの一つだったことが窺われる[49]。

寫眞印刷によって視覺に訴える畫報というスタイルの先驅けとなった『良友』の起源が、デパート經營者と關係が深いところから始まっていたことには、一定の時代性を見て取ることは可能であろう。

經濟史上、ヨーロッパで第一次大戰が戰われていた一九一〇年代は、上海を中心とする中國沿海部では、中國人資本による工業化が一定の進展をみた時代とされる。百貨店の繁榮や映畫產業の發展は、都市部において一定の購買力を持つ階層が成長していたことを背景としていたと考えられる。それは『良友』が提示するモダン上海のイメージを享受する層と重なるであろう。こうした產業の發展は、外國資本對民族資本という二項對立で捉えきれない、華僑資本という中間的な要因が關わっていたことに注目しておきたい。

同様な同時代性は、映畫產業についても指摘できる。一九一〇年代後半以降、上海では映畫會社設立が相次いでおり、

『良友』が創刊した二〇年代半ばはそのピークに當たる。これらのうち、民新（一九二五年）[50]、聯華（一九三〇年）、南方（一九三二年）は廣東人によって創設されたもので、當時映畫館經營、監督、俳優などの映畫製作スタッフにおいても廣東系の人々の活躍が目立っていた。[51]

當時中國の國產映畫の重要な販路の一つに、南洋（東南アジア）の華僑社會があった。非廣東資本の天一公司（創立者邵醉翁（一八九六～一九七五）は寧波人）も、一九二七年にシンガポールの映畫商陳畢霖と共同で天一青年影片公司を設立するなど、早くから南洋重視の姿勢を見せていた。天一青年影片公司自體は成功せず、三年後に解散しているが、一九三〇年代に國產トーキー映畫の製作が開始されると、天一はいち早く廣東語〔粵語〕作品の製作を開始し、三四年以後は香港に撮影所を設け、以後專ら廣東語トーキーを撮るようになる。[52] 中國國產映畫がその草創期において、東南アジア、取り分け廣東語の世界の市場と深い關わりにあったことが窺われよう。[53]

發足當初の良友公司は、やはり廣東系資本の映畫館奥廸安（オデオン）影戲院に隣接しており、映畫館の前に人が集まるのを利用して販賣を行っていたというエピソードがある。[54]『良友』は創刊以來映畫關連の記事を重視しており、良友公司では『良友』以外にも、『銀星』、『新銀星』などの映畫雜誌にも力を入れていた。伍聯德も訪米の際にハリウッドを訪れ、臺山に原籍を持つ華僑の女優黃柳霜（アンナ・メイ・ウォン）を取材している。

『良友』を用いた先行研究が指摘するように、『良友』という雜誌の表象面における特徴は、デパート、ホテル、ダンスホール、映畫館などの一連の寫眞に象徵されるような、都會的な近代性を表す一連のイメージを構築し、讀者に提示したことにある。[55] こうした點については、掲載の對象でもある、デパート、映畫とも呼應したものといえよう。

そこで消費文化をリードする存在となる畫報、百貨店、映畫などの諸產業は、いずれも廣東系華僑のネットワークの中で登場するものであり、資本においても市場においても、海外華僑の世界と不可分に結びついていた。こうした狀況が形成される詳細な過程を明らかにすることは今後の課題だが、その背景としては、廣東系の華僑の中に、相對的に多額の資

本投下と新技術の導入を必要とするようになった新しい文化産業に有利な條件を備えていた者が多かったこと、中國國內市場と海外華僑圈の資本・市場を結ぶ結節點として、香港よりも上海が有利だったこと、などが想定されるだろう。

いずれにせよ、本節の考察により、一九二〇～三〇年代の上海の文化産業は、上海という一都市、あるいは中國國內の中での位置づけに止まらない、香港や海外華僑の世界への廣がりの中で捉えなおすべき存在である、ということが示すことができたと思う。

まとめ

本稿では、モダン上海を象徴する圖像がちりばめられていることで知られる『良友』畫報について、そのスタッフや資本、市場の廣がりなど、メディアをめぐる社會經濟的な關係を中心に考察してきた。

『良友』の出版元である良友公司は、その發足時において、スタッフや資金調達の面で、創業者伍聯德の出身地臺山や母校嶺南のつながりを中心にしたネットワークの影響が色濃く表れていた（第一節）。多數の海外移民を排出した臺山、華僑子弟が多く學んでいた嶺南を軸としたネットワークは、伍聯德の海外遊歷を機に海外へと擴大し、股東の中に香港在住者や在米華僑が大きな位置を占めることになった（第二節）。その後『良友』販賣が軌道に乘ると、それに對應し、伍の個人的な努力を超えた範圍で販路は擴大していく。一方で國內市場の成長に伴い、一九三〇年代の『良友』には國內重視への轉換が見られた。これは同時に、左翼系の新文學作家との關係強化をもたらすことになり、良友公司に新たな一面を附け加えることとなった（第三節）。

視野を廣げてみれば、兩大戰間期の上海の大衆文化面における近代性を象徴するデパート、映畫などの諸産業は、いずれも廣東系華僑のネットワークの中で登場するものであり、『良友』畫報の登場もそうした流れに位置づけられるものだった。ここに、一九二〇～三〇年代の上海の文化産業を、香港や海外華僑の世界への廣がりの中で再定位するという課題

が生じてくる（第四節）。

ブラジル日系移民の音樂や映畫にまつわる體驗を掘り起こした細川周平は、本國と「同じ」映像や音を繰り返す映畫やレコードの存在が、日系人社會で大きな價値を持っていたことを指摘する。[56]『良友』や映畫產業の事例が示すように、中國系の世界においては、複製技術による文化產業はしばしば華僑によって本國にもたらされた。ここでは、方向性は逆になるが、複製技術を用いたメディアが移民と本國を結ぶ上で、やはり大きな役割を果たしている。地理的分布や國境・政治體制をはるかに超えた範圍で人々が頻繁に移動するようになった二〇世紀以降の世界で、移民と出身國の文化活動の相關性を考える際、大量生產や複製技術によって特徵付けられる文化產業にまつわる歷史的經緯を考えることが大きな意味を持つことになるだろう。

本稿の最初の問題設定にある、モダン上海のイメージ形成という點に戻ろう。一九九〇年代に大陸の映畫においてモダン上海イメージが形成されるに先立ち、香港ニューウェーブと呼ばれる映畫監督による一連の作品により、過去の上海のノスタルジーが構築されていたことは、あまり強調はされてはいないが、よく知られたことであろう。[57]舊租界時代の建築物を利用した商業地區開發の例として有名な新天地も、香港資本のデベロッパー（瑞安集團）が主導したものであった。[58]現在の上海イメージの形成にも、香港の資本が大きく關わっていた。

ここには、奇しくも本稿で考察した一九二〇～三〇年代の狀況に良く似た方向性が見られるが、とはいえ、こうした文化と資本の關係は、香港から上海へというような一方向的なものではない。一九四九年の中華人民共和國成立前後、多數の資本家や文化人が社會主義政權を避けて香港に移り住み、五〇年代の香港では「上海化」と呼ばれる現象が起こっていた。[59]『良友』に關しても、香港に居を移した伍聯德は、一九五四年、大陸から南下した文化人を編集に迎えて『良友』「海外版」刊行している。[60]こうしたことが、香港の戰後の工業化や文化產業の發展を說明する唯一の要因とは言えないまでも、その基礎を作ったとは言えるかもしれない。

香港と上海という二都市は、海外華僑圏と中國國内の市場の中間に位置しつつ、國際環境や中國國内政治の動向に應じて資本や人の移動を繰り返してきた。とするなら、中華圏の近代大衆文化史もまた、この二つの都市の歴史を軸に、中國國内と華僑の世界が交錯するものとして描くことはできないだろうか。本稿の作業もその一コマとして位置づけたい。

註

（1）一九五〇～六〇年代の映畫作品における「舊上海」に對する否定的なイメージについては、劉文兵『映畫のなかの上海――表象としての都市・女性・プロパガンダ――』（慶應義塾大學出版會、二〇〇四年）第三部第二章を參照。

（2）映畫『ジャスミンの花開く（茉莉花開）』（侯詠監督、二〇〇四年、中國）でも『良友』が重要な小道具として登場する。

（3）Leo Ou-fan Lee. *Shanghai modern : the flowering of a new urban culture in China, 1930-1945*,（Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1999）はその代表と言えよう。

（4）許敏「《良友畫報》與二三十年代的上海社會生活」（張仲禮主編『中國近代城市企業・社會・空間』、上海社會科學院出版社、一九九七年）、王若梅「《良友畫報》：誰之良友――二、三十年代上海通俗文化研究――」（香港中文大學・修士論文、二〇〇二年）。

（5）當初はモノクロ、あるいは二色刷りだったが、第一〇期（一九二六年一一月）以降、三色版カラー印刷、第四五期（一九三〇年三月）以降從來の網目凸版から寫眞グラビア（カラー）に變えている（梁得所「編者講話」（『良友』四五期、一九三〇年三月、二頁）、伍聯德「良友一百期之回顧與前瞻」（同一〇〇期、一九三四年、四頁））。カラー寫眞グラビア自體は、一九二五年に商務印象館が導入しているが、あまり普及していなかったようだ（Christopher A. Reed. *Gutenberg in Shanghai : Chinese print capitalism, 1876-1937*. Vancouver: UBC Press, 2004, p. 29）。

（6）一三期（一九二七年三月）より良友圖書印刷有限公司。

（7）鍾榮光（一八六六～一九四二）は、廣東香山（現中山市）の人。辛亥革命後、一時廣東省教育司司長を務めたが、一九一三年、香港經由でアメリカに亡命し、コロンビア大學で教育學を學んだ。一七年に歸國した後、嶺南學校副監督（二七年、嶺南大學校長）。國民政府關係の教育部門の役職なども歴任している（徐友春主編『民國人物大辭典』、河北人民出版社、一九九一年、一五六〇頁）。

（8）伍聯德『良友・回憶・漫談』（香港、良友畫報社、一九六六年）、四頁。嶺南學校は、一八八八年、アメリカ長老教會のアンドリュー・ハッパー（Andrew Happer）牧師が廣州に建てた學校が前身で、一九〇三年に中國語名を「嶺南學堂」と定めた。民國以後、大學豫科となり、一九一八年、嶺南大學と改名。一九二七年には中國人が運營す

る「私立嶺南大學」に改編された（王若梅前掲論文、及び『私立嶺南大學章則課程』、一九三四年、校史五～六頁）。

（9）伍聯德『良友・回憶・漫談』（前掲）、五頁。

（10）趙家璧『《良友畫報》二十年的坎坷歷程』（『新聞研究資料』總三七輯、一九八七年）。

（11）趙家璧『《良友畫報》二十年的坎坷歷程』（前掲）、馬國亮『良友懷舊――一家畫報與一個時代――』（臺北、正中書局、二〇〇二年）、一三頁、伍聯德『良友・回憶・漫談』（前掲）、一四頁。

（12）鄺富灼（一八六九―一九三八）は、廣東省臺山縣人。一八八一年、父の命でアメリカに渡り、コロンビア大學を文學、教育學の修士號を獲得。一九〇七年に歸國し、後、上海商務印書館英文部主任となる。二九年に職を辭してからも著述活動を行っていた（『民國人物大辭典』一六一八頁）。

（13）鄺富灼「六十年回顧」（『良友』四七期、一九三〇年、一二～一三、二二、三〇～三一、三六頁）。

（14）李自重は廣東省新寧（現臺山）の人。日本の東亞商業學校に學び、辛亥革命前には興中會、同盟會に加入し、香港で革命運動に參加した。九龍で光漢學校を開設するなど、教育界でも活動、民國成立後は商業活動に從事した（陳玉堂編著『中國近代人物名號大辭典』、浙江古籍出版社、三〇七頁、『香港華人名人史略』五三頁（香港大學圖書館サイト内「孫中山在香港・居港志士」〈http://xml.lib.hku.hk/syshk/E.jsp〉より重引）。李自重の父李煜堂（一八五一～一九三六）は、一八歳で兄ととも

にアメリカに移住して財產を蓄え、歸國後、香港、廣州などで、廣東銀行・保險會社などを中心に様々な事業を營み、上海の新新公司の創設にも關わった。（前掲『民國人物大辭典』三〇七頁）。李煜堂も良友公司の股東の一人で（一九二八年八月の時點で五股）、『良友』第九期（一九二六年一〇月一五日）にも「商業界之良友」として紹介されている。

（15）伍聯德『良友・回憶・漫談』一五頁。

（16）趙家璧『回顧與展望』（山西人民出版社、一九八六年）、七～八頁。

（17）同前、一七～二〇頁。

（18）一九三四年當時の廣東出身上海滯在者の同鄉會（廣東旅滬同鄉會）の會員錄である『廣東旅滬同鄉會會員錄』（一九三四年五月再版、上海市檔案館 Q117-2-77「廣東旅滬同鄉會通訊、本會會員錄、會員名册」所收）を見た限り、本稿に登場するような良友公司の關係者の名前は見えない。

（19）余漢生「良友十年以來」（『良友』一〇〇期、一九三四年、四～五頁）、伍聯德「良友一百期之回顧與前瞻」（前掲）。

（20）伍聯德「良友一百期之回顧與前瞻」（同前）。

（21）「上海良友圖書印刷有限公司第二次擴充招股簡章」（『良友』三二期、一九二八年一一月、二～三頁）。

（22）上海市檔案館 Q90-1-616「良友圖書股份有限公司（一九二八・九―一九二九・七）」。

（23）良友香港支局のスタッフについて、詳細はほとんど明らかでないが、『良友』第二二期（一九二七年一二月）に、會

計黄保文、經理李偉才、副經理關瑞亨の寫眞が掲載されている（一五頁）。名前から推測するに、黄保民と黄保文は近親者か。

（24）同前。

（25）李培德「一九世紀香港廣東商人の商業ネットワーク」（飯島渉編『華僑・華人史研究の現在』汲古書院、一九九九年）。

（26）伍聯德「南遊記」（『良友』一三期、一九二七年三月、二六～二八頁）。

（27）伍聯德「旅途通信」（『良友』一五期、一九二七年五月、二六頁）

（28）伍聯德「遊美歸來」（『良友』一九期、一九二七年九月、二三～二六頁）。

（29）上海市檔案館Q90-1-616（前掲）。

（30）伍聯德「遊美歸來」（前掲）。

（31）馬國亮『良友懷舊』（前掲）、三三頁。

（32）『良友』三二期（一九二八年一一月）。

（33）余漢生「良友十年以來」（前掲）。

（34）都市名は以下のように分類した（同一都市に複數の代理店が記載されている場合もある）。

〔國內〕

①北方：北京、天津

②長江下流：上海、眞如、江灣、蘇州、南京、無錫、常熟、南通

③長江中上流：長沙、重慶、成都

④東南地域：廣州、佛山、中山、汕頭、梧州、南寧、桂林、瓊州海口、厦門、鼓浪嶼

〔國外〕

⑤英領：香港（二七年五月の香港良友公司支店設立以後はこの項目から消える）、シンガポール、ペナン、クアラルンプール、ムアール、マラッカ、イポー、クラン、サンダカン、ヤンゴン、タヴォイ（土瓦）

⑥オランダ領：バタヴィア、スラバヤ、メダン

⑦その他アジア：澳門、バンコク、サイゴン（フィリピンは北米に含めた）

⑧北米（含フィリピン）：フィリピン、ホノルル、バンクーバー、モントリオール、郎度埠（未詳）、シカゴ、サンフランシスコ

⑨南米：メキシコ〈メヒカリ〉、ペルー〈リマ〉、チリ（都市名なし）、キューバ（都市名なし）

（35）『良友』第一六期（一九二七年六月）には香港支店の廣告（九頁）があり、南方の顧客の利便のため、香港大道中三九號に支店を設け、良友公司の各種出版物や體育用品、世界名畫や映畫の特刊などを販賣する、とある。當初この支店は、鄺基理髪店と同店舗内ということで、零細な規模であったと推測されるが、次の第一七期（同年七月）には、香港での販賣部數が五千部に達し、手狹になったため、大道中七〇號に移轉したと公告されている（奥付）。

『良友』第二二期（一九二七年一二月）には、香港良友

チームと嶺南大學チームのサッカー親善試合の模様を寫した寫眞が掲載されている（二二頁）。

（36）一九二九年八月、當時の『良友』編集長梁得所と良友公司經理の余漢生が日本を訪れ、神戸、大阪、宮津、東京などの地を訪問している。この際、案内役を務めたのが滞日華僑の黄式匡と容洽垣（逸園）だった。前者は當時神戸の華僑が開いた同文學校の幹事をしており、後に歸國し、良友公司を離れた梁得所とともに『大衆』畫報を創刊している。

後者（容）は、二九年の梁、余の訪日を契機に良友公司と關係を持ち、後に香港に戻ってからは、停刊に到るまで『良友』の東南アジア方面における販賣の總代理人を務めた。容はまた、香港、シンガポールで美美兒童用品公司を創設している（前掲馬國亮『良友懐舊』、六〇～六二頁）。

（37）馬國亮「本刊百期言」（『良友』一〇〇期、一九三四年一二月、五頁）。

（38）例えば、「登廣告於良友報得收奇效」（『良友』五三期、一九三一年一月、六頁）。民國時期の上海の廣告については、拙稿「民國時期上海の廣告とメディア」（『史學雜誌』一一四―一、二〇〇五年）を參照。

（39）「『良友』讀者遍天下」（『良友』一〇〇期、一九三四年一二月、一八～一九頁）。

（40）『良友』四七期（一九三〇年五月）。

（41）この頃、世界恐慌に起因する金の對銀比價の急騰による輸入原材料の高騰から雜誌の値上げを強いられたこと、同時に海外郵送費の倍增に苦しみ、四九期以降値上げがされたという記述もあるが、賣れ行き自體には影響はなかったという（梁得所「編後話」『良友』五七期、一九三一年五月）。

（42）三一年頃には瀋陽方面での賣れ行きが伸びていたので、瀋陽にも支社〔分公司〕を出そうという計畫があったが、滿洲事變のために計畫は潰えたという（余漢生「良友十年以來」（前掲））。

（43）馬國亮「本刊百期言」（前掲）。

（44）周は、香港先施公司の紀念出版に寄稿しており、香港で受け入れられていたことを窺わせる（馬應彪編『先施公司二十五週紀念册』、一九二四年頃）。なお、馬國亮の回想では、初期の『良友』に鴛鴦胡蝶派の作品が多かったのは二代目編集長周瘦鵑の影響とされるが、實際にはこうした作家たちの寄稿は周の起用より前から存在していた。

（45）馬國亮『良友懐舊』（前掲）、四四～四五頁、趙家璧『回顧與展望』（前掲）六～一四頁。

（46）Lydia H. Liu. *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated modernity: China, 1900-1937* (Stanford University Press, Stanford, California, 1995) の Chapter 8.

（47）高橋俊「上海事變をめぐる報道と上海人アイデンティティの形成――上海における社會・文化變容を通じて――」（『東方學』一〇七、二〇〇四年）。

（48）民國時期上海のデパートについては、以下の文獻を參照。

島一郎「近代上海におけるデパート業の展開」（『同志社大學・經濟學論叢』四七―一、一九九五年）、菊池敏夫「戰時上海の百貨店と商業文化」（『戰時上海――一九三七～四五年――』、研文出版、二〇〇五年）。

（49）連載小説・劉恨我「春夢餘痕（一）」にも、主人公が、新新をモデルにしたと思われる新しいデパートの開店祝いに行ってきたと語る場面が、ストーリーの脈絡と關係なく登場する（『良友』一期、一九二六年二月）。

（50）一九二三年に黎民偉が香港で民新製造影畫片公司を設立したが、成功せず、二五年五月には解散。同年九月、黎が上海で上海民新影片公司として再出發した。

（51）李培德「禁與反禁―一九三〇年代夾縫於滬港電影」（香港電影資料館編『粵港電影因緣』、香港電影資料館、二〇〇五年a）、同「論一九二〇至一九三〇年代上海電影行業的競爭：以民新和天一兩家電影公司爲個案」（『東方文化』（香港）三九―一、二〇〇五年b）。

（52）この間の經緯については、李培德前掲論文（二〇〇五年a、二〇〇五年b）を參照。

天一は邵氏の兄弟による共同經營で、末弟の邵逸夫らの活躍でマレーシア、シンガポールを中心に配給網を確立した。邵逸夫は一九五八年、香港映畫に一時代を築いたショウ・ブラザーズ〔邵氏兄弟（香港）有限公司〕を設立している（鐘寶賢『香港影視業百年』三聯書店（香港）、二〇〇四年、一九七～二〇一頁）。

（53）三〇年代にはトーキーの普及と南京國民政府による國語電影推進政策により、國語電影と粵語（廣東語）電影の市場の棲み分けが進んだという解釋も可能かもしれない。

（54）余漢生前掲文。

（55）Lee, Ibid., pp. 74-76.

（56）細川周平『シネマ屋、ブラジルを行く――日系移民の郷愁とアイデンティティ――』（新潮社、一九九九年）、二一一～二一二頁。

（57）劉文兵前掲書、序六頁、Lee, Ibid.,pp. 333-339.

（58）もっとも、新天地の開發における戰前における「映畫の都」や租界などへのノスタルジーを利用したイメージ戰略については、日系資本（日建シンガポール）やアメリカ人建築デザイナーの發案によるところが大きかったという（神山育美「現代中國における歴史的環境の開發利用――上海「新天地」を事例に――」、『現代中國』八〇、二〇〇六年）。

（59）Lee, Ibid., pp. 326-331.

（60）『良友』海外版は、南北アメリカや東南アジア各地の華僑圏を市場としていたようだが（「本刊各地分銷處一覽」『良友』海外版第三期、一九五四年、三一頁）、上海時代を踏襲したやり方では讀者を獲得できなくなり、伍の健康上の問題を理由に一九六八年に停刊した（王若梅「一脈殊途異地：滬港《良友畫報》之比較」、梁元生・王宏志編『雙龍吐艷：滬港之文化交流與互動』滬港發展聯合研究所、香港中文大學香港亞太研究所、二〇〇五年）。

その後、伍聯德の子伍福強（一九二九～二〇〇六）が一

九八四年に『良友』を復刊し、ビジネスマン向けの雑誌に轉換するなどしたが、あまり成功しなかったようで、その後「良友」の名義は王立興氏の率いる良友國際發展公司に賣却され、良友雜誌社はその一部門となった（林沛理氏からの聞取り）。筆者は二〇〇五年三月に香港の良友雜誌社を訪問し、『良友』編集長（當時）の林沛理氏にインタビューする機會を得たが、この時、良友雜誌社社長の伍福強氏は海外出張中で會うことが出來なかった。伍氏はその翌年の二〇〇六年五月二七日に腦溢血で他界され、聞き取りを行う機會は永遠に失われてしまった。

附記　本稿は、二〇〇二年秋から神奈川大學において開催されている良友讀書會の討論の成果と、參加メンバーによって提供された様々な情報が反映されている。感謝を表したい。

negotiations between Arthur Tricou and Li, and France and China proceeded step by step toward rupture and warfare.

THE PICTORIAL MAGAZINE *LIANGYOU* AND THE OVERSEAS CHINESE NETWORK: THE HISTORY OF "SHANGHAI" POPULAR CULTURE AS SEEN FROM ITS RELATIONSHIP WITH HONG KONG AND THE OVERSEAS CHINESE SPHERE

MURAI Hiroshi

This article primarily considers the socio-economic background of the media in the case of the pictorial magazine *Liangyou* 『良友』, which is known to have been replete with images representing modern Shanghai. Around its staff, capital, and expanding market.

When *Liangyou* was launched, the publishing company, Liangyou Gongsi, was under the strong influence of a network of people from Taishan, the hometown of the founder, Wu Liande 伍聯德, and his alma mater, the Lingnan School 嶺南. The network centered on people from Taishan, Where many emigrants were produced, and the many overseas Chinese who had studied at the Lingnan School spread across the seas under the impetus of Wu Liande's travels abroad, and those living in Hong Kong and overseas Chinese in the United States occupied a prominent place among its stock holders. After sales of *Liangyou* stabilized, the circulation expanded beyond the limits of Wu's personal efforts. In contrast, a shift in the emphasis towards domestic matters began to be seen in the *Liangyou* of the 1930s, accompanying its expansion in the domestic market. This brought about a strengthening of the relationship with leftist authors of the New Literature movement and marked at the same time the beginning of a new page in the history of the Liangyou Gongsi 良友公司.

Expanding the perspective, one sees that the department stores, films and other industries that symbolize the modernity in the popular culture of Shanghai between the two world wars all first appeared within the context of the network of overseas Chinese from Guangdong, and the appearance of the pictorial magazine *Liangyou* can be placed within this tread. Here is created the task of resituating cultural production of Shanghai of the 1920s and 1930s within the sphere of Hong Kong and overseas Chinese throughout the world.

This study can be situated as one portrait within a series of efforts to depict the

history of Chinese modern popular culture centered on the two cities of Hong Kong and Shanghai, where the worlds of the overseas and domestic Chinese were complexly intertwined.

THE RELATIONSHIP OF THE SULṬĀNS OF GOLKONDA AND MARITIME TRADE AND PORTS: FOCUSING ON THE REIGN OF SULṬĀN ʻABD ALLĀH QUṬB SHĀH (1626-72)

WADA Ikuko

The Sultanate of Golkonda (the Quṭb Shāhīs), 1518-1687, first extended its rule over the coastal areas of Andhra during the latter half of the 16th century. It has been recognized that ships, known as the "king's ships," sailed from their base at the main port of Masulipatnam after their rule was solidified in this region at the end of the 16th century. The destinations of the king's ships were the ports of the Red Sea. These ships not only transported pilgrims but also played a role in importing gold, silver and horses. We do not know that the sulṭāns visit trading ports during this period, but when incidents arose involving the trading ports and trade, there were cases in which they intervened to settle the matter.

Thereafter there was a period of decline in the activities of the king's ships, but when the sea route to the Persia Gulf came into use in the decade of the 1630s, the route began to be employed for pilgrimage of the royal family, and the king's ships began to voyage to the Persian Gulf. It was during the rule of Sulṭān ʻAbd Allāh, when the first visit to Masulipatnam by the sulṭān of Golkonda was made. He visited the trading port at the close of 1639, met with foreign and domestic merchants and had the opportunity to witness its actual operation. It was probably through this experience that the sulṭān's interest in trading ports and trade was strengthened, and it is thought that this had great influence on later voyages and trade activities.

It has been confirmed that after about year 1650 the king's ships voyaged toward Southeast Asia, and their sphere of activities was extended to both the east and western shores of the Indian Ocean. The sulṭāns would fund the activities of these ships, build up diplomatic and trade relations with the rulers of Southeast Asian lands, and place their representatives in these ports. Although they were rulers of territory within the interior, their direct and indirect involvement with trading ports and trading activities can be seen in this fashion.